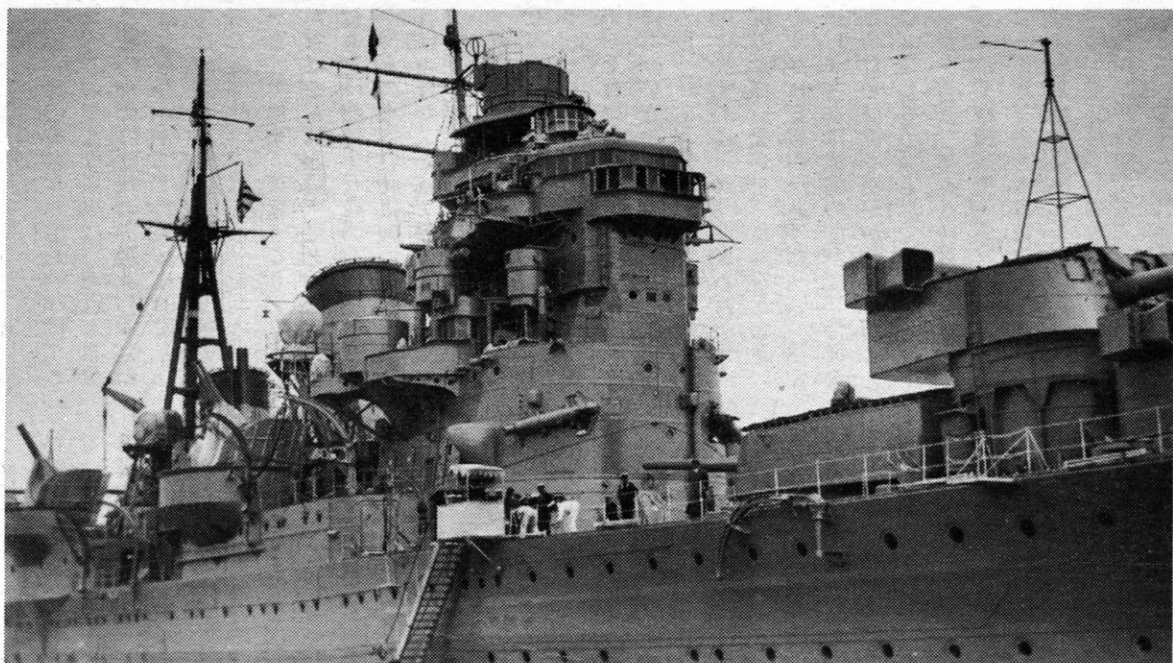




エキスパート士官短現システム研究

海軍士官となったエリート達

東京の夏は暑い。とくに海がちかい築地では、蒸し暑さがひとしおである。その暑さのなかで、白い海軍軍装の百十名が整列している。

やがて一列になって動きだした隊列の先頭をいくのは、鳩山威一郎海軍主計中尉である。眉の濃い中曽根康弘中尉の姿も見える。「帽振れ」をしているのは、吉川大佐、山沖中佐ほかの海軍経理学校的首脳部、教官たちである。

日米の開戦がせまりつつあるなかで、第六期主計科二年現役士官たちは、教育をおえて任地にむけて巣立っていった。

軍艦に乗り組み、あるいは鎮守府で勤務するかれらは、昭和十八年のうちに軍務をしりぞき、官庁や実業界に復帰するはずであったが、太平洋戦争の進行はそれを許さなかった。

四年後の昭和二十年八月十五日の敗戦の日を、部隊の主計長や本部の部員など、比較的責任の重い立場でむかえて敗戦処理にあたったかれらは、占領軍進駐後の九月になって主計少佐に進級し、海軍を去った。

海軍経理学校には生徒の課程があ

り、海軍兵学校とおなじように、主計科の正規士官を養成している。しかし、平時は毎年二十人前後という少数であり、戦争のために増員された昭和二十年三月の卒業生でさえ、九十八人にすぎない。

たりない士官は、大学の経済学部や商学部卒業生、経済専門学校の卒業生を採用することでおぎなっていた。

軍医や技術の士官には、もともと生徒の課程がなく、大学や専門学校の卒業生を採用することになっていたのである。このような、大学、専門学校の卒業生を兵科、機関科などの初級士官として採用し、二年間だけ勤務させる制度が二年現役士官の制度であった。この制度はのちに、短期現役士官、略して「短現」とも呼ばれている。

二年現役は専門家グループ

二年現役士官は、採用の日から中尉（専門学校卒は少尉）の階級章をつけて、三カ月たらずの基礎教育をう

●特集 知られざるエリート●
海軍短現士官の戦歴

けていた。採用の通知をうけ、はじめて海軍省に出頭するときに、着ない中尉の軍装で歩くのであるから、ピエロのようなものである。下級者から敬礼をされて、ドギマギしながら答礼をしたと回想している人がある。

それまで気楽な学生生活をおくっていた人間が、急に海軍士官の態度をとれるものではない。

このような不都合をあらためるためと、予備学生など他の制度とのからみもあって、昭和十七年四月に見習尉官の制度が発足した。

この制度は、大学、専門学校を卒業して初級士官の候補者として採用されたものを、少尉の下の見習尉官という身分で採用し、基礎教育終了後に中尉または少尉に任官させるものである。

これによって、二年現役士官制度は、基礎教育の期間をやや延長して四、五カ月とし、そのあいだは見習尉官のままということにあらためられた。予備学生も、それまでは水兵の身分から海軍生活をはじめていたが、この制度発足後は、見習尉官の身分で採用されるようになった。

しかし、見習尉官の採用という場合は、二年現役士官の採用というのがふつうである。予備学生制度は、

兵科の予備の士官を養成する制度であって、大学出であつても、基礎教育を一年ちかくおこなったのちに少尉に任官する。

二年現役士官は、それぞれの分野の専門家であることを前提にしており、そのために、士官に必要な基礎的な短期間の教育がおわれば、大学出は中尉に任官させたのである。

戦争の進行とともに、二年現役士官も、二年で海軍を去ることはできなくなった。服務期間を延長することが、当然のようになったのである。

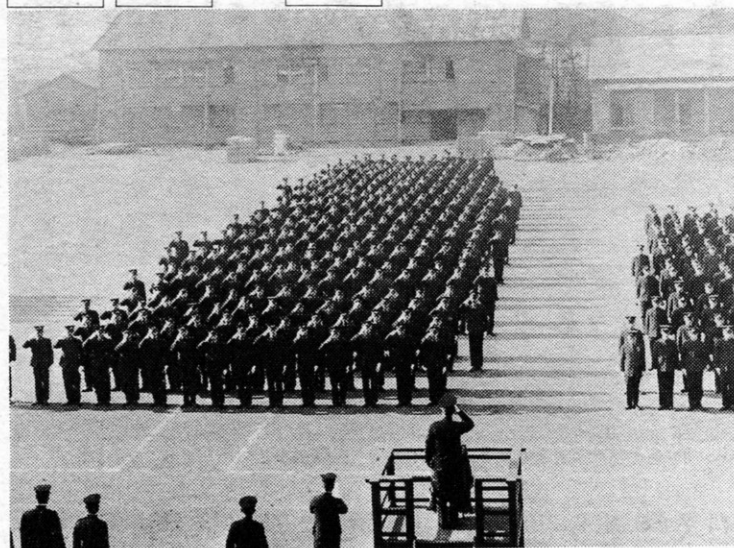
海軍を去って予備役になったとしても、すぐに召集されればおなじことである。そのうえ、現役よりも不利なあつかいをつけることにな

武器なきI

兵学校や機関学校出の正統派とはちがい、一般大学や専門学校で修得した知識を活用して海軍という軍事システムで潤滑油的な働きをした短現士官——これら指揮権なき知的エリートの人任官制度を歴史的にみる！

▶兵科も機関科も短現士官もともに軍艦旗のもとで戦った
▼東京築地にあった海軍経理学校における主計科8期短現

直 ただす
谷 が
熊 くま



る。二年現役とはいいいながら、二年ではおわらなくなったために、見習尉官の制度ができるまえのものもふくめて、短期現役という用語がつかわれるようになったのであろう。二年現役にしろ、短期現役にしろ、ひろくつかわれた用語ではあるが、法令上の正式のものではない。

短期現役という用語は、昭和十四年の兵役法改正までは、別の意味でつかわれていたので、混同しないようにしなければならぬ。

当時、小学校の先生は中学校（現在の中学校から高等学校にまたがる学校）と同等の師範学校で養成されていたのであるが、国民に国家意識を植えつけ、富国強兵をはかる施策の推進役として、重視されていた。

そのため、この師範学校卒業生で教職についている者は、兵役期間を短縮されていた。

一般の青年が二年とか三年の兵営生活を送ることを義務づけられていた昭和初期に、かれらは五カ月の兵営生活を送り、下士官に任官して、そのまま国民兵役にはいることになっていた

のである。国民兵役にはいれば、召集される可能性はほとんどない。

このみじかい期間の兵営生活を、短期現役と呼んでいたものであり、明治時代には六週間の兵営生活ですんでいたもので、六週間現役兵という呼び方がされている。大正七年から昭和二年までのあいだは、一年現役兵であった。

師範学校は全寮制であり、兵営のように規制でしばられ、学校教練がきびしくおこなわれていたので、そのせいもあって、兵役期間が短縮されていたのである。

昭和になってからは、海軍でもこの短期現役兵が現役生活を送っているので、用語そのものはなじまれていたはずである。その用語を、二年現役士官に転用したのである。

アメリカにならった学士士官

第一次大戦中のアメリカは、急速な軍の拡張のために、士官不足に悩んだ。兵員数が三、四十倍に増えたのであるから、士官もそれにみあう数が必要である。そこで大学生や大卒業者が動員され、短期間の訓練で士官にしたてあげられて前線に送られた。

この教訓が生かされて、現在でも

ROTCと呼ばれる学校教練の課程を大学でとったものは、予備士官になることができる。大卒卒業後、士官候補生学校などで数ヵ月間の教育を受けたのち、士官としての軍務につけば、徴兵時代であっても、兵士として服務する義務がなくなるのである。

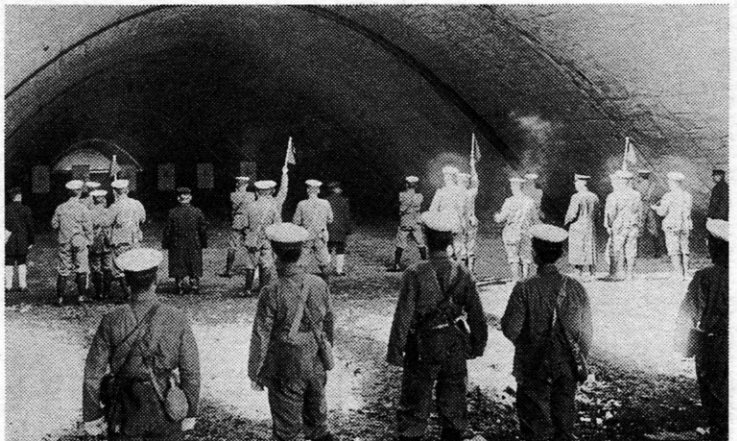
日本陸軍の甲種幹部候補生制度はこれに似ているが、海軍の二年現役士官の制度のほうが、いきなり中尉、少尉に任官させたことや教育期間のうえで、もっと似ているといえよう。

二年現役士官の制度が海軍にとりいれられたのは、第一次大戦後の軍縮時代で、大正十四年である。このときは軍医科十七人だけの採用であったが、昭和

七年には薬剤科一人がくわわり、昭和十三年に、造船、造機、造兵の技術分野と、主計科に拡大された。

幹部候補生の制度がない海軍では、これが特殊分野の予備員をつくるのに役だった。二年間で現役をおえ、予備役にはいった大尉クラスを、いざというときには召集できるからである。

同時にこの制度は、人材の活用という面でも好ましいものであった。



拳銃の射撃訓練も海軍士官の「しつけ」教育のひとつとしておこなわれた

当時の日本の男子進学率は、中等教育で十五パーセントぐらい、専門学校以上へは五パーセントぐらいである。三人に一人が、大学に進学する現在とはちがっている。

そのすくない専門学校出や大学出の若者を、専門に関係がない単純な仕事をする兵士として徴集することは、むだである。

陸軍は国土防衛のための国民皆兵意識があったためか、高学歴者を兵

士にすることをしたが、海軍は、士官にイギリス流の貴族意識があったことと、技術尊重の性質があったためか、高学歴者を尊重しようとする傾向が強かったようである。二年現役士官の制度は、海軍だけのものではあった。

海軍には、昭和十六年に歯科医科が、また翌年には法務科が新設され、二年現役士官の採用範囲も両科に拡大された。

造船、造機、造兵、水路の純技術的な各科は昭和十七年に合併され、これらの二年現役士官の採用も、技術科一本でおこなうようにあらためられた。しかし、大砲や火薬を担当する造兵と、エンジンを担当する造機では、大学での専攻が別になるので、採用選考は、それぞれの分野別になっている。

陸軍の幹部候補生には、軍医や経理の分野もあるが、主体は歩兵や砲兵など戦闘分野におかれている。平和時の海軍でこれにあたるものは、商船学校出身者から採用した予備員であった。

しかし、それだけでは足らなくなつて、制度をととのえたのが海軍予備学生生制度である。戦闘分野の予備員養成の制度が予備学生生制度であるので、大学を卒業して採用され

たものが、大学での専攻を生かすことができないわけではない。二年現役とは、そこが大きくちがっていたのである。

二年現役は、専門の能力を生かして現役士官として勤務するのであるから、大学卒業後、中尉からスタートするうえ、大尉に昇任するまでの期間が、予備学生の中尉よりも半年だけみじかい。

当然のこととして、二年現役士官の資格をみたくしているものは、第一志望を二年現役士官にし、予備学生を第二志望した。このことから、予備学生出身者と二年現役士官のあいだには、感情的に微妙なものがあったようである。

なお、二年現役士官を採用した各科には、正規の士官として長期勤務をしている大学、専門学校出の士官

がいたのであるが、かれらと二年現役士官との関係は、学校の先輩後輩の関係の延長である場合がおおく、兵科の海軍兵学校出の士官と予備学生出身の士官との関係よりは、問題がすくなかったようである。

二年現役士官は、ピラミッド型の階級構成のなかで、そのすそ野にあ



卒業時期をはやめて動員された学徒のなかからも短期現役士官を志望するものが続出した

昭和十六年十月十六日のニュースは、第三次近衛内閣の総辞職でもちきりであったが、大学生、専門学校生にとつては、発表された在学期間の

たる部分を埋めていたのであり、上の階級にいくことがないだけに、人事管理の手段としてつかわれていた半面もある。

戦争が生んだ大量の短現士官

短縮のほうがいせつであつた。翌年三月の卒業予定者の卒業が十二月にくりあげられ、卒業と同時に徴兵検査をうけて入営することになったからである。

近衛公爵にかわつて首相の座についたのは東條陸軍大将であり、もはや対米開戦は避けられない状況になっていた。在学期間の短縮は、まもなく中学校などにも拡大され、昭和十八年三月卒業の予定者は、前年の九月三十日に卒業することになった。

こうして卒業時期を早めた学生、生徒たちは、戦場や軍需産業の場で国家に奉仕することになった。

昭和十八年十月には、いわゆる学徒動員がおこなわれた。これは文科系の学生にかぎり、卒業時期を早めただけではたりずに、在学中でも徴

発行・献書刊行会

前田昌宏著 人間魚雷ノート

回天の思想

特攻は純粋で、文字や文学をもって到達できる境地ではない——そんな先入観を破るのが『回天の思想』である。本書は、力づく口マン溢れる鎮魂の書！

〈内容見本呈〉

◇著者は、特攻の若者たちの生きかたとその最期に、南浜に回帰することを願う古い日本人の因縁をさへ感じ、それから見れば山本五十六、井上成美、いや海軍兵学校の教育そのもののさへ低いかなたの存在に過ぎないのである。そこに著者の特攻隊員に対する限りない愛情があり、それを生みだす人としての動機や、戦後あえてそれらを語ろうとしない歴史に對しては、思ひのたけをここのなにつめこんでいる。ぜひ一読されるようおすすめしたい。

元水交會會長 内田一臣

●頒価1万円のところ、「丸」愛読者の皆様に
特別頒価7000円(税込)送料360円
748頁/上製/函入にてお分けいたします。

ご注文は品名、数量、送金額、住所、氏名を明記して前金でお願いします。代金・送料は為替、振替、現金書留で送金ください。落丁等以外の発送後の返品はご容赦ください。

東京都中央郵便局私書箱第2000号

潮書房『丸』代理部

振替東京2-145396 03(3265)8651(代表)



短現士官の主力は軍艦建造などの技術科であった

卒業にはなったので、十月一日付で学生服から海軍軍装に衣替えるものができた。

そのうちの軍医、歯科医、薬剤の見習尉官たちは、朝鮮半島北部の元山航空隊で、三カ月の基礎教育をうけることになった

ちであった。

三カ月後に、なんとか軍装が身につけてきたところで中尉に任官し、東京築地の軍医学校で専門の教育をうけたのである。

かれらが東京で教育をうけているあいだに、日本軍はガダルカナルから撤退し、ソロモン方面の戦況は、しだいに悪化していった。四月十八日には、山本連合艦隊司令長官が戦死している。

このようななかで、軍医学校での勉強をおえたかれらは、戦勢不利な第一線にむかって出発していった。とくに軍艦に乗り組んだものは、戦闘員ではないのに、おおくの戦死者をだしており、立派な戦歴をのこしている。

主力はインスタント技術士官

前述したように、二年現役士官の制度は、軍医科からはじまっている。

日華事変開始前の海軍の正規現役軍医の採用数は毎年、二十五人前後であった。二年現役軍医も、ほぼ同数である。大学医学部を卒業し医師免状をもっていれば、正規の軍医と二年現役軍医に資格上の差はない。そこで海軍の拡張にともなって、

二年現役から正規の長期服役に身分変更をさせようとする動きが強くなっていった。これは軍医だけのことはなく、主計も技術も、すべての分野で人がたならなかったのである。このような分野の士官は、兵科士官とはちがいが、直接、戦闘行動をするわけではない。部隊を戦闘のために指揮するとき、海軍では軍令承行令という規則で、指揮をする資格者の順位がきめてある。

おなじ中尉であっても、海軍兵学校出は、予備学生出の古い中尉よりも順位が上になっている。下士官あがりの特務中尉は、海軍兵学校出も予備学生出もいないときに、はじめに指揮できる。

しかし、主計や軍医は、大佐、少将になっても戦闘の指揮をすることはできない。主計科や軍医科の部下に命令することはできるが、それは一般の病院や役所で業務命令をするのとおなじことである。

軍令承行令について、兵科ではうるさい問題が生じたが、最初からそのわく外におかれている二年現役士官の職場では、身分出身による差別はあまりなく、二年現役から長期服役への変更も容易であった。

また、多数の戦死者をだすことを前提にはしていないので、兵科のよ

兵適齢の二十歳になったものは、たちちに兵役につかせる処置がとられた結果である。

この処置のおかげで陸海軍は、五万人の幹部要員を採用することが可能になり、幹部不足を解消できるはずであった。

軍の人事担当者のもくろみどおり、動員された学徒のおおくは、陸軍の幹部候補生や海軍の予備学生、短期現役士官を志望し、少尉、中尉の九割以上を占めるようになった。

昭和十七年九月三十日にくりあげ卒業になった学生のなかには、その翌日、見習尉官になったものもいる。学徒動員の対象にならなかった医学部や工学部の学生も、くりあげ

のである。

この年の採用者はとくにおおく、一月採用分もくわえて軍医科五百二十五人、歯科医科四十五人、薬剤科三十七人である。歯科医科は、十月一日付の採用がはじめてであった。ほかは前年の二倍を採用している。

くりあげ卒業のために、夏休みを返上して勉強してきたからであつたが、軍装への衣替えをすませたとたんに、もっと苦しい教育が待っていた。

基礎教育の科目には、敬礼のしかたや立ちいふるまいだけではなく、操艦や陸戦の基礎まではいっている。カッター漕法で尻を赤くし、銃剣術で闘志を燃やすことも教育のう

うに多数の予備員をつくっておくという思想はなかった。予備学生の制度は、兵科だけのものである。

戦闘に直接関係しないということでは、技術科と法務科のほうが主計科、軍医科よりも上である。

技術科は昭和十七年七月の改正で、造船、造機、造兵、水路の各科を合併したものであり、艦艇や航空機、兵器の研究、製造をおこなう。水路部門だけはやや異質で、海図や航路の整備をおこなうのであって、現在の海上保安庁に業務がうつがれている。

技術科の正規士官の採用数は、平時は軍医とほぼおなじで、年間二十人前後であった。それも、大学の学部在学中に海軍依託学生に採用して学資を支給し、卒業後、造船中尉などに任官させるという方式が主であった。

巡洋艦「古鷹」や「妙高」の設計者として有名であり、東大総長にもなった平賀造船中將はこのようなかたちで、造船の最高権威者になっている。当時は各帝大工学部卒の優秀な頭脳が、こうして海軍にあつまっていた。

技術分野の二年現役士官をはじめて採用したのは、主計科とおなじ時期の昭和十三年七月である。このと

きは主計科の三十五人よりもおおい九十九人が、横須賀の海軍砲術学校で基礎教育をうけている。

採用数は、年とともに増加し、見習尉官制ができた昭和十七年には千九百十人になり、翌十八年には千二百二十二人に増えた。この数は、軍医科や主計科の二倍から三倍であり、短期現役士官の主力を占めたのである。

かれらは海軍直営の兵器工場である工廠や、航空技術廠の技師として勤務し、また民間軍需工場の監督官として、短現仲間の主計監督官とともに、その任にあたった。

短現が語られるとき、技術科短現が話題になることはすくないが、技術と生産の戦いであつた大戦時に、後方で大きな役割りをはたしたのがかれらである。

海軍式マネージメントの源流

日米間開戦直前に海軍士官（大將少尉）として、海軍で服務しているものの員数を下表に示したが、現役数のうち、技術関係は半数、主計科は三分の一が二年現役士官だと考えてよい。

軍医も予備役からの応召者約一割をのぞいた残りの三分の一が、二年

現役士官になる。応召者にも、二年現役士官がふくまれている。

日華事変のために動員がつづいてきた当時は、すでにこのように、二年現役士官が大きな役割りをはたしていた。その後は毎年、三千人以上が採用されているので、昭和二十年八月の敗戦のときには、総数が一万人を越えていたと考えられる。なお、予備学生の動員は三万人以上である。

敗戦時の海軍の士官、予備士官の総数は五万四千人であつた。そのうちの四万人でいとは、大学、専門学

■開戦直前の海軍士官現在員数（昭和16. 10. 1）

項目	総数	兵科	機関	軍医	薬劑	主計	技術
現役数（二年現役延期を含む）	8,907	3,765	1,396	1,289	69	1,079	1,309
応召者数	1,664	1,180	351	115	0	18	0
現役・応召合計（比率%）	10,571 (100)	4,945 (46.8)	1,747 (16.5)	1,404 (13.3)	69 (0.7)	1,097 (10.4)	1,309 (12.4)

校出身の臨時の士官であつたことになり、動員された学徒たちがはたした役割りの大きさがわかるであろう。

戦後、小泉信三元慶応大学塾長が長男の死を悼んで書いた「海軍主計大尉小泉信吉」によつて、短現の存

在は有名になった。「雲流る果てに」という遺書集によつて、海軍予備学生のほうが先に有名になっており、学徒出陣と予備学生が結びつけられて考えられることがおかつたが、小泉博士は、学徒のもう一つの活躍の場が、海軍にあつたことを教えてくれた。

しかし、先述のように、短現で採用数をもっともおかつたのは、技術科である。かれらの活躍を忘れてはなるまい。

また、軍医その他各科の短現で、第一線で苦勞をした人はおおい。敗戦を知つて割腹自殺をした人もおおい。戦争に懷疑的な人もおかつたとはいっても、それぞれがあたえられた役割りをはたしたことは変わりはない。

かれらのほとんどは、海軍時代を誇らしげに語り、そこで得たものが、その後の実生活の場で役立ったといっている。

会社経営に「海軍式マネージメント」が活用され、その体験が活字になっている状況を見ると、効率や能率を教えるうえで、海軍の方式は有用であつたと思うと同時に、リーダーシップを身につけさせるためには、若いときに体験させることが必要だと痛感するのである。